

雪上バレーボール普及の可能性について

～開催地区実態調査～

野口 京子*

キーワード：雪上（スノー）バレーボール，スキー場，イベント

目 的

バレーボール競技の中には、アウトドアで行う「ビーチバレーボール」があることはよく知られている。ビーチバレーボールはアメリカを中心に1950年代以降ポピュラーなスポーツとして親しまれ、1992年第25回バルセロナ大会において、オリンピックのデモンストレーション競技として紹介された。そして1996年第26回アトランタ大会からは正式種目となっている。

このように、夏に砂の上で行われるバレーボールとしてビーチバレーボールは普及、定着しているが、冬季、日本国内の降雪地域でイベントとして雪の上で行うバレーボール（以下：雪上バレーボール）があることは、あまり知られていない。

そこで本調査では、日本国内において開催されている雪上バレーボールがいつ頃から、どこで、どのようなルールで行われているのかを調べ、その内容について明らかにすることを目的とした。また、得られた結果から課題を抽出し、雪上バレーボール普及の可能性について考察した。

調 査 方 法

本調査は、まずインターネット検索により、キーワードの「雪上バレー」「スノーバレー」で検出された団体に対してアンケートへの協力を依頼し、詳細について聞き取り調査を行った。また、Yahoo全国スキー場サイトにおいて検索された496カ所のスキー場の中からランダムに抽出した46カ所のスキー場、索道協会、観光協会等には、電話やメール等で雪上バレーボールの開催について問い合わせた。

回答が得られた調査結果を元に、開催地域別の開催回数、大会開催の目的、総参加人数、大会開催費（イベント全体にかかるものも含む）を一覧にまとめた。また適用ルールについては、多くの大会が既存のルールを元にオリジナルルールを作成している場合が多いため、そのベースとなったルールについてまとめた。さらに、大会を開催する上で重要なコート設営、使用するボールに関しては担当者の意見を参考とし、改善の方向性や研究の必要性について考察した。これらを総合し、参加者の感想を加味した上で、将

来的に雪上バレーボールが広く普及する可能性について検討した。

調 査 結 果

インターネット検索から検出された地域に対して実態調査を依頼した結果、新潟県十日町市（十日町雪まつり）、栃尾市（遊雪祭）、富山県富山市山田（牛岳スキー場）、秋田県湯沢市（いぬっこ祭り）、福島県耶麻郡北塩原村（グランデコスノーリゾート）、島根県邑智郡邑南町（瑞穂ハイランド）、山形県酒田市（ひらた雪ん子目ん玉まつり）、新庄市（雪の里情報館雪まつり）、長野県飯山市（戸狩温泉スキー場）の9カ所から回答が得られた。しかしスキー場46カ所、索道協会4カ所、および降雪地域観光協会8カ所に問い合わせを行ったが、雪上バレーボールは確認できなかった。

回答のあった地域について、これまでに行われてきた開催回数が多い順に一覧とし、雪上バレーボール大会開催の目的を示した。その際、地域おこしのためのイベントという重複する目的を持つ場合は、主立った目的について示した。また、参加人数については1チームの参加人数が違うため、およその参加総数を示すことで、大会規模を知る手がかりとした。その結果、十日町市で開催されている大会が最も歴史が古く、また大会規模も最も大きなものであり、次いで牛岳スキー場の大会も同等の歴史があったが、こちらは大会規模としてはそれほど大きくはなかった。しかし9カ所の開催地のうち6カ所は2001年以降に始まり、歴史的にみた場合、雪上バレーボールは最近広まり始めたイベントの一種ということが明らかとなった。大会費については、チーム単位、個人参加費を含まず、大会の為に主催

表1 地域別開催概要

	開催地	開催数(回)	目的	参加人数(人)	大会予算(千円)
1	十日町市	17(1990)	イベント	300	300
2	富山市山田	16(1991)	地域活性	70	400
3	湯沢市	10(1997)	イベント	100	200
4	耶麻郡北塩原村	7(2001)	イベント	40	50
5	邑智郡邑南町	5(2003)	イベント	150	320
6	酒田市	5(2003)	イベント	40	30
7	新庄市	4(2004)	イベント	60	30
8	飯山市戸狩温泉	3(2005)	イベント	100	400
9	栃尾市	1(2002)	イベント	100	200

注：開催数の()は初回年度

*信州大学非常勤講師

者が盛り込む参加予算を一覧にまとめた（表1）。

それぞれの適用ルールについては、レクリエーションの要素を多く含み、人数が揃い易い4人制を導入している地域が多くみられた。また地域独自のオリジナルルールを創作している地域もあった。創作ルールの一例として、十日町市では、半径約6メートルの円形を中心から3分割した変形コートで（図1）、同じ持ち点からの減点方式とし、いずれかのチームが0点となったとき、残り点数の多いチームが勝利となる方式を採用していた。この大会は2007年で第59回目を迎える「十日町雪まつり」のプログラムの一つ、呼称「ツマリアンボール」大会として17回目の開催を誇っている。それは毎年参加者が50チーム300人を越える規模で開催されている。

参加者の年齢層については、スキー場を中心とした会場での参加者は10歳代と20歳代が多く、ママさんバレーボールを中心としているイベントでの参加者は30歳代から40歳代が多くみられた。祭りなどのイベント大会の参加者は、小学生から50歳代まで幅広い年齢層が参加していた。

競技運営面では、すべての地域において雪面整地、雪中に埋めこむ安定した支柱（特注制作）、ラインの作成、使

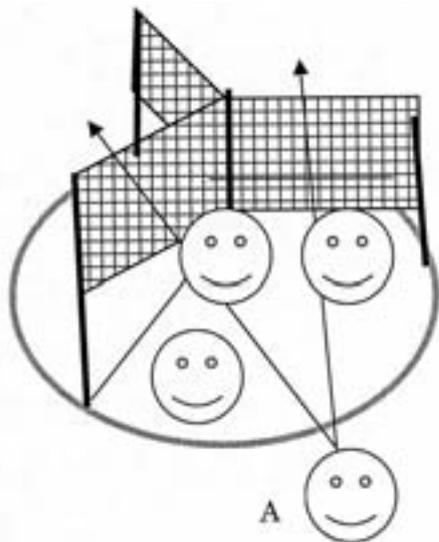


図1 十日町市「ツマリアンボール」のコート

Aのサーバーは、二つに分けられたコートのどちらかにサーブを打ってもよい

表2 適用ルール、ライン、ボールの種類、参加者年齢層

	開催地	適用ルール	ライン	ボールの種類	参加年齢(歳代)
1	十日町市	4人制特殊	粉状炭	ミニソフト	全
2	富山市山田	4人制	ビーチバレー用	ソフト	全
3	湯沢市	6人制	色水	ソフト、ビーチ	全
4	耶麻郡北塩原村	4人制	ビニールテープ	ソフト	10～20
5	邑智郡邑南町	4人制	ビニールテープ	ソフト	全(30～40)
6	酒田市	6人制	カラースプレー	ソフト	全
7	新庄市	9→6人制	カラースプレー	ソフト	全
8	飯山市戸狩温泉	4人制	ビニールテープ	ローインパクト	30代前後
9	栃尾市	4人制	不明	ソフト	小学生～30

用ボール等に工夫を凝らしていた（表2）。

雪上バレーボール大会の開催は地域の経済効果を高めることにも貢献しているようである。特にスキー場近隣地域では、大会賞品にリフト券や宿泊券、地域の特産品などを提供し、バレーボール大会参加に合わせて、宿泊をからめたゲレンデスポーツを楽しめる企画も行っていた。最近のお笑いブームに乗り、大会終了後に参加者限定ライブを開催して、宿泊数が増加したところもあった。また地域の祭りに合わせた大会では、他のイベントにも参加するために宿泊施設を利用するが、地域内宿泊施設では足りず、周辺地域にも波及効果があった。

雪上バレーボール大会の盛り上げのために、元オリンピック選手なども参加していた。大古誠司氏（実況解説）、大林素子氏（テレビ番組のライター）、川合俊一氏、川合庶氏（ゲストプレーヤー）、石田京子氏（ルール監修）らが普及に一役買っていた。また、多くの地域の大会開催趣旨は競技志向よりも楽しむことに重点を置いていた。女性だけの参加チームと男性ばかりのチーム対戦においては、勝負に大差がつかないように男性の数によって点数にハンデを設ける、あるいは必ず女性一名を加えなければならない等、参加者に制限をつける工夫がなされていた。

また、当日飛び入り参加することができるミニゲームでは、スポンサー賞品の争奪戦を行っていた。勝者表彰だけでなく、着ぐるみや看護師の制服をユニフォームにするなど、仮装を楽しむ参加者が大会を盛り上げていた。

調査項目の中で、苦労したことや工夫したことについての回答から、コートの設営に関する事項を以下に示した。

1. 少雪、多雪によるコート設置
2. ゲレンデ斜面を重機で整地
3. コンクリートを詰めた缶の中にボールを入れて固めた特注品支柱
4. 支柱を単管で製作し、雪中部分は十文字に接着させ、滑車を溶接、テニスの巻き取り部分を取り付けリサイクル利用
5. 支柱に洗濯物干し台を利用
6. ライン製作（カラースプレー、色水、ビニールテープを埋め込む）
7. 審判台を設置面積の広い安定したりんご箱で作成

以上のように、すでに雪上バレーボールを開催している地域では大会用具に統一性はみられず、しかもそれぞれの地域や大会の状況に応じて様々な工夫が凝らされていることが明らかとなった。ボールについては、痛みの少ない柔らかなボールが使用されているが、軽すぎて風に流され、試合が成り立たない場合もあるという。

考 察

降雪のない地域では、雪上でバレーボールを行うという発想はおそらく生まれてこない。この調査を始めるに至っ

たのは、著者が在住する地域のスキー場が低迷し、衰退しつつある中で、生き残りをかけたイベント案の一つとして雪上バレーボール大会を広げていくことが模索され、すでに雪上バレーボールを開催している地域の存在を確認することがきっかけであった。当初は我が町を「雪上バレーボール発祥の地」として大きくアピールする予定であった（飯山市戸狩温泉）。しかし調査を進めていくうちに、すでに9つの地域が開催していることが明らかとなり、著者自身大変な驚きを持ってその結果を受け止めた。しかも、すぐ隣町の新潟県十日町市においては17年前から雪上バレーボール大会が開催され、他に類をみないオリジナルルールで参加人数も最大規模の大会が行われていたことは、さらなる驚きであった。

本調査から、雪上バレーボールの大会を運営するためには、特にコート設営に関して大変な苦労があることが明らかとなった。アウトドアであるため天候が競技に大きく影響するが、簡易で丈夫な支柱やネット、雪上専用バレーボールなどが開発され、滑りにくい靴や手袋などができれば、雪上バレーボールはより親しみやすい冬季のアウトドアスポーツになると思われる。また新しいスポーツ分野の発展は、スポーツメーカーにとっても新たな市場開拓につながるのではないだろうか。

各開催地担当者は「参加者には大変人気がある」と話すことから、口コミで広がって行く可能性もあるといえる。うまくタレントやメディアを取り入れてアピールしていく必要もあるだろう。スキー場での新たなスポーツとして普及すれば、ゲレンデの活性化、周辺宿泊業の顧客増大につ

ながり、地域振興にも貢献できるのではないだろうか。

バレーボールは、年齢を超えて誰でも行えるスポーツであるため、コミュニケーションを作り易い。また、スキーやスノーボードの他、冬季運動不足になりがちな体を動かす健康作りに役立つ効果も期待できる。今回の調査結果から雪上バレーボールは競技性よりもレクリエーション的な要素が多く含まれていること、様々な対象者が参加できること、また参加者にも好評であることなどから、今後はルールや用具を統一することで開催地域間の交流も生まれてくるのではないだろうか。現在実施していない降雪地域にも普及していく可能性は大きいといえる。

昔は屋外で円陣パスが行われていたが、現在は体育館が整備されてバレーボールは室内競技が一般的とされるようになった。しかし、夏はビーチバレーボール、冬は雪上バレーボールという選択が加わってくるのは考えるだけでも楽しい。特に海のない地域の人々はビーチへ、雪の降らない地域の人々は雪国に出かけてバレーボールを楽しむのも、新しいバレーボールの在り方と考えられる。

雪上バレーボールが新たなスポーツとして普及し、降雪地域での新しい楽しみとして、また生涯スポーツとして幅広い年齢層に広がることを期待している。その普及の延長線上には、冬季オリンピック正式種目という夢も生まれてくる。

なお、本調査は2006年度バレーボール学会研究助成の適用を受けて行われた。



写真1 長野県飯山市 スノーバレーボール2007大会



写真2 新潟県十日町市 ツマリアンボール選手権大会 (2007)